

ジャクソン・ポロック《ナンバー29、1950》についての研究 —ジャンル横断効果の視点から—

入江彩美（水戸芸術館現代美術センター）

本発表では、アメリカの画家ジャクソン・ポロック（1912-1956）が1950年に制作した《ナンバー29、1950》の位置づけを試みる。この作品は、ポロックが制作した作品の中でもカンヴァスの代わりにガラスを媒体として用いた唯一の作品であるが、ガラスが用いられた理由については、写真家ハンス・ネイムス（1915-1990）がポロックの制作中の姿をガラス越しに真正面から撮影するためだったと言われてきた。さらにこの作品には、ガラスにメッシュやボタン、金属片など様々な素材を貼り付け、絵具をしたたらせるポーリングと併用しているという特徴がある。

ポロックは、クラシック期と呼ばれる1946年～1950年には、エナメルやアルミニウムペイントを木の棒などで滴らせて、オールオーバーな画面を生み出す制作方法を用いていたが、1951年11月の個展では、むき出しのカンヴァスに、黒一色の液状の顔料をスポイトなどで垂らす、いわゆる「ブラック・ペインティング・シリーズ」と呼ばれている作風を発表する。つまり1950年の《ナンバー29、1950》は、この移行期に位置することになり、その特異な画風は1950年から1951年のポロックに生じた作品観の変化と関係するものと考えられるのである。

本発表においては、まず《ナンバー29、1950》の制作の経緯を検証し、この作品がどのような特徴を持っているかを確認する。その際、エレン・G. ランドウの言及に基づき、ポロックが建築家ピーター・ブレイク（1920-2006）とともに計画した、1949年の理想的美術館計画の展示方法に着目した。この美術館はガラスの壁面を持ち、絵画と彫刻を並列して展示する建築空間を想定しており、《ナンバー29、1950》と共通する特徴を持っている。ここから、《ナンバー29、1950》は、絵画・彫刻・建築の3つのジャンルを横断するような効果が現れ出ているタブローであると位置づける。

次にその特徴を、ポロックの理論的後盾であったクレメント・グリーンバーグの当時の思想と照らし合わせることで、クラシック期と「ブラック・ペインティング・シリーズ」のはざまにある問題点を照射し、《ナンバー29、1950》でポロックが探求したジャンル横断の発想の背景を明らかにする。

最後に、以上の考察を通して、《ナンバー29、1950》を1950年から1951年にかけての、ポロックの作風の変遷をつなぐ架け橋として位置づける。1951年以降の「ブラック・ペインティング・シリーズ」では、にじみの効果によって視線が絵画空間の内側へと導かれるが、この空間意識は、ガラスを使うことで絵画の前後に空間を作り出す《ナンバー29、1950》において、すでに過渡的に現れていると考えられるのである。